

本書の工夫として目に留まるのは、各章のタイトルにその国の政治を理解するためのキーワードを用い、初学者のつかみを得ようとしている点である。インドネシア（第1章）は「多様性の中の統一」、マレーシア（第2章）は「民族の政治」、フィリピン（第3章）は「争われる民主主義」、シンガポール（第4章）は「超管理国家」、タイ（第5章）は「国王を元首とする民主主義」といったぐあいであり、ベトナム（第6章）、ラオス（第7章）、カンボジア（第8章）、ミャンマー（第9章）、東ティモール（第10章）の各章にも、それぞれ鍵となる語句を付している。

内容は、概ねどの章も高い水準にあるようにみえる。文章や言葉がこなれているということや、事実関係をめぐる誤謬が（管見のかぎりだが）見当たらないという点がまず重要である。意味論的視点をまじえて政治史や政治体制を論じたものもあり、おもしろく読める。各章の冒頭で「この章で学ぶこと」を明示するなど、散漫な学習にならないための配慮もある。また、各章の最後には、「本文では書けないエピソードや虐げられる人々の物語を入れることで、本文をより理解できるように」（あとがき）との目的で、読みごたえのあるコラム（写真付き）を配置している。本文にかかわる資料として、巻頭の地図と基本情報表（面積・人口・GDP）、巻末の東南アジア関連年表、本文挿入の表、各章ごとの文献紹介がある。全体にムダがなく、仕上がりのよい本だと思う。

しかしながら、本書は、大学の学部の講義で使用する教科書としては必ずしも適当とは言えないかもしれない。東南アジアの政治について——というよりも政治そのものについて——予備知識の少ない学生のためのテキストとしては、言葉づかいが高度すぎると感じる箇所が多い。漢字を多用しすぎていたり、フォントが小さめで余白が狭いといった視覚的な問題も、学生の教科書としてのマイナス要素である。

評者の勤め先で100人の学生を相手に講義を行う情景をシミュレートしてみると、一番の問題は本書の「構成」にある。本書は、半世紀をこえる東南アジア各国の現代政治史を、個別かつ順々に叙述するかたちをとっている。一見そこに不自然

さはないが、注意したいのは、各国の政治発展が多様であるとはいっても、それには限りがあるということだ。西欧列強の植民地支配、日本軍政、国民国家建設の苦悩と政治混乱、独裁政権の成立、経済開発、貧富の差の拡大、民主化運動と続く流れは多くの国が共有する。講義で本書を使用する場合、毎回、諸国が共有するこの流れ=フォーマットを、学生の耳に慣れない固有名詞を埋め込みながら使っていくことになるだろう。ある国について20世紀中葉から話し始めて現在にたどりつき、次の週にはまた別の国の20世紀中葉に戻る。その反復は聴く側にとって少々つらいことかもしれない。聴く側がそう感じれば、話す側もへこたれてくる。

このように、本書を学部の教科書として使われるという確証はもてない。しかし、仮に大学院の演習向け教材としてみると、本書はかなり良好なテキストだといえるのではないか。たとえば、毎週報告者を替えて、ディスカッションの時間を多くとる。テキスト外の四方山話もどンドンするとよい。5週目をすぎたあたりから、学生たちは、東南アジアやその政治への興味を深め、比較の楽しさを味わうことになりそうだ。

（佐々木拓雄・久留米大学法学部）

小野林太郎、『海域世界の地域研究——海民と漁撈の民族考古学』地域研究叢書24。京都大学学術出版会、2011、524p.

本書は、著者が2005年に上智大学大学院外国語学研究科に提出した博士論文に、その後の調査の成果を組み入れ、加筆・修正したうえで刊行した、東南アジア海域世界を対象とする地域研究の著作である。中心的な考察の対象はセレベス海域である。セレベス海域とは、フィリピン・ミンダナオ島の南部、スルー諸島、マレーシア・サバ州の南東岸、インドネシア・スラウェシ島の北東部、サンギヘ・タラウド諸島の島嶼・沿岸からなる、セレベス海を中心とする地理空間を指している。セレベス海域は、更新世期（氷河期、約180万年前から約12000年前頃まで）にも大陸化せず、また更新世期から現在まで（旧）スダ大陸と（旧）

サフル大陸の異なる生態圏をつなぐ海の遷移帯であり続けた。こうした地形形成史・生態史的な特徴を念頭において著者は、セレベス海域を東南アジア海域の人類史を理解するうえで独自の重要性を持つ小海域世界と位置づける。本書は、このセレベス海域の生業文化に関する自らの調査データの分析に、島嶼部東南アジアからオセアニアまでの生業文化に関する先行研究の知見を加え、東南アジア海域世界の地域像——特に「移動分散型社会」[鶴見 1987]という観点からみた地域像——を人類史的な時間幅で描き出そうとする、時空間双方の面でスケールの大きな地域研究の試みである。

副題に掲げられているように、方法論の軸は民族考古学であり、広義の海民の漁撈を中心とする生業文化が主な分析対象になっている。本書の民族考古学のアプローチは、具体的には、考古学的な発掘調査と民族誌的な臨地調査それぞれの成果を往還的に参照しながら、対象地域の生業・生活の基層を再構築しようとするものである。考察において中心的な位置を占めているのは、1999年から2010年までに、マレーシア・サバ州のセンボルナおよびインドネシア・北スラウェシ州のタラウド島それぞれにおいて著者自身が断続的に実施してきた、発掘調査と民族誌的調査に基づく分析である。

構成は、序章と本文7章に分けられている。序章では、まず東南アジア海域（世界）研究における問題の所在、海民等の鍵概念の定義、対象海域の特徴が示される。ついで、民族考古学の方法論的展開を整理したうえで、本書が「個別・歴史主義的な視点と法則・普遍主義的な視点」(p. 40)の双方を組み合わせた地域研究の立場から記されることが宣言される。第1章「現代セレベス海域の自然と人」は、対象地域の自然環境、民族、生業についての概説である。第2章「セレベス海域の生業文化と人類史」では、セレベス海域における自然資源利用の通史と人類の移住・拡散の過程が、この海域で人類の痕跡が認められるようになる約4万年前頃から、10～11世紀以降の「交易・植民地時代」に至るまでの5つの「画期」に分けて跡づけられる。

第3章「『沿岸漁撈システム』の形成——新石器時代のセレベス海民」は、本書の根幹をなす章である。この章では、まずセンボルナの新石器時代遺跡（約3500～2500年前頃）における自らの発掘調査の成果が綿密に分析・記述される。重点がおかれるのは、人類の生業と食生活の痕跡を示す海産動物の遺存体、特に魚骨の分析である。著者は、その分析結果に基づいて、セレベス海域では新石器時代までに、サンゴ礁資源の利用を基盤とした「沿岸漁撈システム」と呼ぶ生業様式が確立されていたことを明らかにする。第4章「『沿岸漁撈システムの発展』——金属器～植民地時代のセレベス海民」では、タラウド島における発掘調査と先行研究によりながら、金属器時代（約2000～1000年前頃）から植民地時代までのセレベス海域と東南アジア海域における、生業様式の持続と変化が跡づけられる。

第5章「現代サマの漁撈——近代以降における漁撈戦略の様相」は、本書のもうひとつの根幹をなす章である。ここでは、現在のセンボルナの漁民を対象とする生態人類学的な調査に基づいて、かれらの漁撈活動の基本部分が高新石器時代にはじまる「沿岸漁撈システム」と共通していることが指摘される。第6章「漁撈のインポリューション？——近現代のセレベス海民」では、近代以降（国民国家の成立後）のセレベス海域における海産資源利用と生業様式の発展が辿られ、漁具漁法の精緻化（＝「インポリューション」）と、操業規模の大型化・漁場の拡大という二つのベクトルで類型化される。

結論部にあたる第7章「漁撈からみた東南アジア海域世界の海域像」では、前章までの議論をもとに、セレベス海域と東南アジア海域における生業文化の発展過程が人類史的な時間幅で再検討される。その作業からまず導かれるのは、セレベス海域の生業文化が高新石器時代に確立された「沿岸漁撈システム」を基層としてきたという、本書の骨子をなす理解である。ついで、自然資源利用と生業戦略に焦点をおいて地域像を捉えなおした場合、現代のセレベス海域を含む東南アジア海域世界の「移動分散型社会」としての性格は、新石器時代にはすでに顕在化しはじめていたとする推論

がまとめられる。最後には、東南アジアの他の「マイクロな小海域世界」との比較をふまえ、セレベス海域は、サンゴ礁が卓越する沿岸の海洋生態への適応を果たした人々が、外洋深海などの異なる海洋生態に向かうための技術や知識を蓄積した海域、いわば人類の海洋生態への適応過程における「階段の踊り場」[鶴見 1990] だったのではないかと推論的に結んでいる。

さて、これまでの紹介からも明らかのように、本書のきわだった特徴は、対象としている時間の幅の長さにある。具体的な考察にかかわる部分だけでも、その時間の幅は、新石器時代から現代までの約 4000 年に及ぶ。さらに全体の議論では、約 4 万年にわたる東南アジア海域の人類史が視野におかれている。ただし、このように長大な時間を扱う一方で、著者は、発掘調査と臨地調査双方の定量的な分析を土台にして、きわめて実証的にセレベス海域の地域像を探っている。著者はまた、民族考古学における「民族誌的類推法」の限界をふまえ、「純粋に生態環境や技術的による制約を受け、それゆえにより普遍的側面が強いと考えられる生業活動」(p. 41) に分析の対象を限定することをあらかじめ明示し、その限定のもとでセレベス海域および東南アジア海域の人類史を跡づけている。本書のアプローチの壮大さ、方法論の独自性は、個々の分析・考察がこうした学問的厳密さのもとで展開されていることとあわせて、評価されなければならない。

ついで本書の論点にかかわる意義についていえば、それはなにより、セレベス海域の基層的な生業様式を「沿岸漁撈システム」として概念化し、同システムの連続性と展開をいま述べたような人類史的なスパンで実証的に跡づけたことと、そのうえで、人類の移動と海洋生態への適応に目を向けて、東南アジア海域世界におけるセレベス海域の人類史的な位置づけを示したことにある。その議論の基盤をなす緻密な分析と考察は、東南アジア海域世界の生成・再編にかかわる様々な分野の研究に独自の影響を与えることになるだろう。

他方で、いま述べたような独自性の高さに起因するのかもしれないが、本書には、分析概念や議論の展開、構成などに関して問題と思われる箇所

もいくつかあった。ここでは二点、短く指摘しておく。第一の問題は、考察の軸をなす概念についてである。本書では、鶴見良行 [1987] が提唱した「移動分散型社会」や、田中耕司 [1999] が論じた「フロンティア」等の概念が、東南アジア海域の地域像を再検討するための鍵概念として援用されている。これらの概念は、しかしながら、主に「交易・植民地時代」以降の東南アジアの社会文化動態を理解するために用いられた概念であり、新石器時代の分析をひとつの軸とする本書の人類史的な考察に適用するときには、著者自身によるそれらの整理ないし再定義が不可欠である。「移動分散型社会」や「フロンティア」をめぐる議論、特に結論部における議論がやや曖昧になってしまっている理由のひとつは、その作業が欠如していたからであると思われる。他に、地理的な概念としての○○海域と、地域研究における地域概念としての○○海域世界が、全体を通して明確に区別されずに用いられていることも気になった。

第二の問題は、本書でいう「交易・植民地時代」、つまり文字資料が利用可能になる時代の扱い方にある。この時代の東南アジア海域については、豊富な先行研究の蓄積がある。本書も、漁撈や交易、海民の移動にかかわる断片的な記述については広く文献を参照している。しかし、それらのあり方を特徴づけた時代区分や地域枠組みに関する先行研究の議論(たとえば Kathirithamby-Wells and Villiers [1990] や Ptak and Rothermund [1991]) には、ほとんど注意を向けていない。そのため本書からは、この時代の海民の生業経済や移動の動態の側面、それらの変化の具体的な文脈がみえてこなかった。「交易・植民地時代」の記述(第4章の後半部と第7章の一部)は、独立した章を設けて体系的にまとめたほうが良かった、というのが評者の印象である。

以上、若干の問題点を付記したが、これらはもとより本書の中心的な価値にかかわるものではない。本書の一義的な価値は、東南アジア海域研究の系譜に人類史という斬新な視点を接合し、その学問的な射程と可能性を大きく広げたことにある。

(長津一史・東洋大学社会学部)

引用文献

- 田中耕司. 1999. 「東南アジアのフロンティア論にむけて——開拓論からのアプローチ」『〈総合的地域研究〉を求めて——東南アジア像を手がかりに』坪内良博(編), 75-102 ページ所収. 京都: 京都大学学術出版会.
- 鶴見良行. 1987. 『海道の社会史——東南アジア多島海の人びと』東京: 朝日新聞社.
- . 1990. 『ナマコの眼』東京: 筑摩書房.
- Kathirithamby-Wells, J.; and Villiers, John, eds. 1990. *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*. Singapore: Singapore University Press.
- Ptak, Roderich; and Rothermund, Dietmar, eds. 1991. *Emporia, Commodities, and Entrepreneurs in Asian Maritime Trade, C. 1400-1750*. Stuttgart: Steiner Verlag.
- 王柳蘭『越境を生きる雲南系ムスリム——北タイにおける共生とネットワーク』京都: 昭和堂, 2011, 404p.

はじめに

民族誌的な作品の魅力は、細部の記述にある。インフォーマントの生の声や、人びとの行動の観察記録などは、私たちの想像力をかきたて、私たちを未知なる世界に引き込む。しかし他方で、作品が細部の記述に終始すれば、人類学的な分析としての価値は半減する。仔細な民族誌的データに忠実になれば、分析の枠組みが不安定になり、逆に分析の枠組みを堅固なものにすれば、民族誌的面白みを犠牲にすることになりかねない。本書は、そうした困難な試みに果敢に取り組んだ、良質の民族誌的作品だ。

同時に本書は資料的価値をも有する。50年後、100年後に誰かが、北タイの雲南人コミュニティで調査をするにしても、本書はそれら未来の研究者たちに重要な資料を提供するであろう。本書に収録された詳細な語りや民族誌的記録の隅々に、私たちは新たな発見、新たな価値を見出す。まず

は本書の民族誌的データをもとに、全体を貫くキーワードである「越境」と「共生」にこだわりながら、本書の内容を私の言葉で要約したい。

本書の構成と内容

本書は第1章から第7章、および終章の、合計八つの章から構成されている。第1章から第7章までのタイトルと内容は以下のとおり。

第1章 目的と方法

第1章では、本書の目的と調査対象の紹介、それに先行研究などが示される。理論的な枠組みとして、従来の移民、越境研究を批判的に検討し直し、同化論などから、ディアスポラ論などへ続く系譜を整理する。そのうえで、「地域歴史的なコンテキストに依拠しつつ、かつ国境内外をめぐるネットワークによる多面的な生存戦略から移民の生きる地域と民族間の動態をその地に生きる人びとの視点にそって実証的に明らかにする事例研究ははじまったばかりである」(p.16)として、「移民と地域との関係性を重視し、移民によってどのように地域が創出されるのか」(p.3)を解明することを、移民研究の新たな課題として提示する。

第2章 タイへの越境と集落形成の歴史的展開

第2章では、北タイにおける雲南人集落の地理的分布と歴史的形成過程が紹介される。本章前半で紹介される北タイの雲南人集落の地理的データは、集落の地理的位置から民族構成、人口規模に至るまで、資料的価値が極めて高い。後半部分では「難民村」の歴史的形成過程を、回想録や伝記を基に再構成する。「難民村」を構成する母体となった「国民党軍という組織」が、「移動過程で多様な民族を吸収して再組織された雑部隊」(p.49)であったこと、「雲南人の中で民族性はさしたる集合的意味を帯びて」おらず、「回や漢といった民族的な背景は自他を区別するうえで」(p.58)重要性を有していなかったことが示される。また、そもそも「雲南人側から見れば、この時期の北タイ国境というのは、国と国を隔てる分断線としては強く認識されて」おらず、「ビルマ軍からの攻撃を逃